

ルンペルシュチルツヒェン

RUMPELSTILZCHEN

グリム兄弟 Bruder Grimm

青空文庫

むかし、あるところに、こなやがありました。水車小屋でこなをひくのを商売にして、まずしくくらはいました。ひとり、きれいなむすめをもっていました。

ところで、ひよんなことから、このこなやが、王さまとむかいあって、お話することになりました。そこで、すこしばかり、ていさいをつくろうため、粉屋はこんなことをいきました。

「わたくしに、むすめがひとりございますが、わらをつむいで、金にいたします。」

王さまは、こなやの話を聞いて、

「ほほう、それはめずらしいげいとうだね。ほんとうに話のとおり、おまえのむすめに、そんなきょうなことができるなら、さぞおもしろいことであろう。では、あした、さつそく城へつれてくるがいい。ひとつ、わたしがためしてみよう。」と、いいました。

さて、むすめが、いやおうなし、王さまのところへつれてこられると、王さまは、むすめをさつそく、わらのいっぱいぶんであるおへやにいれました。そうして、糸車とまきわくをわたして、こういきました。

「さあ、すぐと、しごとにかかるがよい。今夜からあしたの朝はやくまでかかって、この

わらが金につむげなければ、そちのいのちはないものとおもうがよいぞ。」

こういいのこして、王さまは、じぶんでへやの戸に、じょうをかってしまいました。むすめは、ひとりぼっち、あとにのこりました。

さて、むすめは、ぽつねんとそこにすわったきり、いったいどうしたらいいのか、とほうにくれていました。わらを金につむぐなんて、そんなこと、まるでわかりようはありません。だんだん、心配になつてきて、とうとう、たまらなくなると、むすめはわつと泣きだしました。

するうち、ふと、戸があきました。ひとり、豆つぶのように小さな男がはいつてきて、
「こういいました。」

「こんばんは、こなやのおじよつちゃん、なんでそんなになしそうに泣きなさるえ。」
「まあ、あたし、わらを金につむがなければならぬのだけれど、どうしてするものかわからないの。」と、むすめはいいました。

すると、こびとがいました。

「わたしが、かわりに、それをつむいであげたら、なにをほうびにくれるえ。」

「この首かざりくびをね。」と、むすめはいいました。

こびとは、首かざりをもらうと、糸車の前にすわりました。ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん、三どまわすと、まきわくは、金の糸でいっばいになりました。それから、こびとは、また二ばんめのまきわくをかけて、ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん、三どまわすと、三どめで、またふたつめのわくが、いっばいになりました。こうやって、あとから、あとからとやっていくうち、朝になりました。もうそれまでに、のこらずまきわくは、いっばい金の糸になっていました。

お日さまがのぼると、もうさつそく、王さまはやってきて、へやじゆうきらきら光っている金をみて、びっくりしました。すると、よけい、いくらでももつと金がほしくなりました。

王さまは、また、こなやのむすめをもうひとつの、やはりわらのいっばいつんである、しかもずっと大きなおへやへ、つれていかせました。

そうして、こんどもまた、いのちが惜おしかったら、ひと晩でこれを金の糸につむげと、いいつけました。

むすめは、どうしていいかわからないので、泣いていますと、こんどもやはり戸があいて、そこにこびとが姿をあらわしました。そうして、

「わらを金につむいだら、なにをわたしにほうびにくれるえ。」と、いいました。

「わたしの指にはめているゆびわ。」と、むすめはいいました。

こびとは、ゆびわをもらうと、また糸車をぶるるん、ぶるるん、まわしはじめました。

そうして、朝までに、のこらずのわらを、きらきら光る金の糸にしあげました。

王さまは、うずたかい金の山をみて、にこにこしながら、でも、まだまだそれだけではまんぞくできなくなりました。それで、またまた、わらのいっぱいである、もつと大きいへやへ、こなやのむすめをつれていかせました。そうして、

「さあ、今晚のうちに、これをしあげてしまふのだよ。そのかわり、しゅびよくそれをしてあげれば、わたしの妃きさきにしてあげる。」と、いいました。

「よし、それがこなやのむすめふぜいであるにしても、それこそ世界じゆうさがしたって、こんな金持の妻つまはないからな。」と、王さまは考えていました。

さて、むすめがひとり、ほつねんとしていますと、れいのこびとは、三どめにまたやってきて、こういいました。

「さあ、こんどもわらを金につむいであげたら、なにをほうびにくれるえ。」

「あたし、もう、なんにもあげるものがないわ。」と、むすめはこたえました。

「じゃあ、こういうことにしよう。王さまのお妃におまえがなって、いちばんはじめにうまれたこどもを、わたくしにくれると約束やくそくおし。」

(どうなるものか、さきのことなぞわかるものではないわ。)と、こなやのむすめは考えていました。

それに、なにしろせつばつまったなかで、なにをほかにどうしようくふうもありません。それで、むすめは、こびとのぞむままの約束をしてしまいました。そうして、こびとは、三どめにまた、わらを金につむいでくれました。さて、そのあくる朝、王さまはやってきてみて、なにもかも、ちゆうもんしたとおりにいつているのがわかりました。そこで王さまは、むすめとご婚礼こんれいの式をあげて、こなやのきれいなむすめは、王さまのお妃になりました。

一年たつて、お妃は、うつくしいこどもを生みました。そうして、もうこびとのことなんか、考えてもいませんでした。すると、そこへひよつこり、こびとがへやの中にあらわれて、

「さあ、約束やくそくのものをもらいにきたよ。」と、いいました。

お妃はぎくりとしました。こどもをつれて行くことをかんにんしてくれるなら、そのか

わりに、この国じゆうのこらずのたからをあげるから、といつてたのみました。でも、こびとは、

「いんにや、生きているもののほうが、世界じゆうのたからのこらずもろうより、ましじやよ。」と、いいました。

こういわれて、お妃は、おろん、おろん、泣きだしました。しくん、しくん、しゃくりあげました。それで、こびとも、さすがにきのどくになりました。

「じゃあ、三日のあいだ待つてあげる。」と、こびとはいいました。「それまでに、もし、わたしの名前をなんとするか、それがわかったら、こどもはおまえにかえしてあげる。」そこで、お妃は、ひと晩じゆう考えて、どうかして、じぶんの聞いて知っているだけの名前のこらずのなかから、あれかこれか、考えつこうとしました。それから、べつにつかいの者をだして、国じゆうあるかせて、いったい、この世の中に、どのくらい、どういう名前があるものか、いくら遠くでもかまわず、のばせるだけ足をのばして、たずねさせました。

そのあくる日、こびとはやってきました。お妃は、ここぞと、カスパルだの、メルヒオールだの、バルツエルだの、でまかせな名前からいいはじめて、およそ知っているだけの

名前を、かたはしからいつてみました。でも、どの名前も、どの名前も、いわれるたんびに、

「そんな名じゃないぞ。」と、こびとは首をふりました。

二日^{ふつか}めに、お妃は、つかいのものに、こんどはきんじよを、それからそれとあるかせて、いったい世間^{せけん}では、どんな名前をつけているものか聞かせました。そうして、こびとがまたくると、なるたけ聞きなれない、なるたけへんてこな名前ばかりよつていきました。

「たぶん、リツペンビーストっていうのじゃない。それとも、ハメルスワーデかな。それとも、シュニールバインかな。」

でも、こびとはあいかわらず、

「そんな名じゃないぞ。」と、いつていました。

さて、三日めになったとき、つかいのものはかえつてきて、こういう話をしました。

「これといつて、新しい名前はいっこうにたずねあたりませんが、ある高い山の下で、その森を出はずれたところを、わたくしはとおりました。ちょうどそこで、きつねとうさぎが、さようなら、おやすみなさい、をいつておりました。そのとき、わたくしはふと、そのへんに一けん、小家^{こいえ}をみつけました。その家の前に、たき火がしてありまして、

火のまわりに、それはいかにもとぼけた、おかしなかつこうのこびどが、しかも一本足で、ぴよんぴよこ、ぴよんぴよこ、とびながら、はねまわっております。そうして、いうことに、

きようはパンやき、あしたは酒つくり、

一夜あければ妃のこどもだ。

はれやれ、めでたい、たれにもわからぬ、

おらの名前は、

ルンペルシュチルツヒエン。

と、こうもうしております。」

つかいの者の話のなかから、こびとの名前を聞きだしたとき、お妃はまあ、どんなによろこんだでしょう。みなさん、さっしてみてください。さて、そういうそばから、もうそこへ、れいのこびとはあらわれました。

そうして、「さあ、お妃さん、どうだね、わたしの名前はわかったかい。」と、いいました。

お妃はわざとまず、

「クンツかな。」

「ちがうわい。」

「では、ハインツね。」

「ちがうわい。」

「じゃあ、たぶん、おまえの名前は、ルンペルシユチルツヒエン。」

「悪魔あくまが話したんだ、悪魔が話したんだ。」と、こびとはさげびました。そうして、腹あなだちまぎれに、右足で、したか大地をけりつけると、からだごとうずまるくらい深い穴あながありました。それから、いかりたけて、両手に左足をひっぱるひょうしに、じぶんでじぶんのからだを、まつぶたつにひきさいてしまいました。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ルンペルシュチルツヒエン

RUMPELSTILZCHEN

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 グリム兄弟 Bruder Grimm

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>